

佐賀県医療センター好生館看護学院 令和6年度自己評価

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	1	学校のビジョン及びそれを実現するための組織目標を策定しており、教職員に理解され看護学院の年度目標に反映しているか。	好生館の中期目標及び学院の教育理念、教育目的に沿って組織目標を設定し学校運営に当たっている。 年度目標を具体的な行動レベルに落とし込んだことで、目標を達成する取り組みが段階的に着実に実施・評価できている。	○		
学校運営	2	学院の運営に関する委員会の目的が明確であり、十分に検討されているか。また、決定事項は周知徹底できているか。	学院運営の基本的項目については毎月2回開催する運営会議で全て議論し、決定している。運営会議の結果は各学科とも教務会議を行い各教員に周知している。 また法人(病院)全体の重要事項を議論する好生館の統括責任者会議の結果についても、必要なものは職員に周知している。 このほか、入学式等全職員の共同での作業が必要なものについては職員会議を行い、情報を共有している。	○		
学校運営	3	より良い学生を確保するために、入学生の募集活動の充実を図り、志願者数の増につなげているか。	志願者を確保するために、次のような取り組みを行い、助産学科一般入試で8.4倍、看護学科入試で2.3倍の受験倍率を確保した。 <募集広報> ・学院の紹介パンフレットについては、説明文や写真を最新の情報にアップデートし、2000部増刷した。 - 県内の高校への配布や佐賀駅バスセンターへの配置に加え、両親、祖父母の目にも触れるように、医療機関、高齢者施設等にも配布した。 - 配布に当たっては、前年度同様、好生館だよりの10月号送付時に同封してもらった。 ・ホームページについても最新の情報に更新し、情報発信に努めた。パンフレットや募集要項は全て掲載している。 ・県内の普通科高校17校の進路指導室を訪問し、学院のPRを行うとともに、学生の進学希望状況の情報収集を行った。 ・佐賀県専修学校・各種学校連合会主催の学校紹介ガイダンスのうち、当学院への進学実績がある高校2校の校内ガイダンスに参加した。 ・学校説明会（オープンキャンパス）については、例年どおり夏期（7月末～8月初め）に4日間開催し、助産学科が延べ4回52人、看護学科が延べ10回93人の参加があった。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			また、看護学科は初めて春期（3月末）にも開催し、1回で21人の参加があった。 ・学校説明会では、職員が入らず参加者と学院在校生のみで交流できる時間を設け、「率直な質問ができた」と好評であった。 <入学試験> ・助産学科・看護学科ともに2段階選抜（1次試験(学科)、2次試験(面接)）を実施し、学力と人物、双方を評価して合格決定している。 ・過去6年分の入試問題をホームページに掲載し情報提供している。			
学校運営	4	卒業生の県内就職率を高めるために、学生への情報提供等が充実するよう工夫をしているか。	入学者説明会の時点から佐賀県内の就職情報を積極的に紹介するとともに、入学後も折に触れ県内就職を推奨している。 （助産学科） ・入学後早期に個人面談を実施し、学生の意向を確認し指導している。令和6年度は12名中8名が県内就職し、県内就職率（66.7%）は令和5年度を上回った。 （看護学科） ・面接や学生から相談を受けた際には県内就職を推奨した。その結果、令和6年度卒業生の県内就職率（84.8%）は令和5年度を上回った。 ・また、2年生に向け12月に好生館からの就職説明会を実施したことで県内就職希望者が増加している。	○		
学校運営	5	災害など非常時に学校活動が継続できる体制が整っているか。	非常時に学校活動を継続させるために、次のような取組みを行った。 ・非常時にLINEを使って学生に連絡できる体制を整え、実際に通報訓練も行った。なお、緊急時は学院に登校せず、自宅スマホから送信できるようにしている。 ・台風や大雨・大雪の場合、休校の判断を当日朝6時半までにLINEで一斉連絡することとしている。 また、自宅周辺等の状況により登校が危険と判断した場合は、自らの判断で個別休校とすることができる。その場合は欠席扱いとしないこととしている。 ・災害時に備え、ご飯、乾パン、水等の備蓄を行っている。 ・災害時に帰宅できない学生を学内に一時宿泊させることとしている。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	6	学院として積極的にボランティアに参加するなど社会貢献に努めているか。	（看護学科） ・学生は、SAGA2024 全障スポの移動救護班やサポーター、肥前精神医療センターのオフラインキャンプ、リレー・フォー・ライフ・ジャパン・2024 での受付や会場整理、空港訓練、兵庫地区の児童クラブ、高齢者サロン、障害者施設でのボランティアなど積極的に参加しており、特に1年生は全員ボランティア活動を行った。 ・また、福岡県八女市星野村に保存されている原爆の残り火「平和の灯」を北九州市から長崎市まで看護学校学生がリレー形式で歩いてつなぐ「ナイチンゲール平和の灯運動」に学生19名、教員4名が参加し19.4kmを繋いだ。	○		
学校施設	7	講義や実習を行うために必要な施設整備を行っているか。また学生の自主的な学習の場が確保されているか。	（助産学科） ・旧式のインファントウォーマー（演習用）を、病院で使われている最新タイプに変更するとともに、産科用吸引器を新たに備え、より臨床に即した環境を整えることで、学生の実習時の戸惑いがなくなるようにした。学内演習でも活用できた。 ・360度カメラを新規購入し、OSCEでの振り返り時に細かい技術チェックを行いやすくした。また、書画カメラを導入し、テキストやパンフレットの投影を行うことで画像の共有が容易になり、ペーパーレスにもつながった。 （看護学科） ・実習施設で使用する寝具を学院でも使用できるようにした。 ・国家試験対策の一環としてe-learning「看パス」を導入した。学生がすき間時間に活用できるツールであることから、講義終了時や実習前後の知識の確認や国家試験に向けた自主的な学習に活用できた。 （事務） ・前年度に各講義室に設置した天井設置型のプロジェクター及びスクリーンを、基礎看護実習室にも設置し、授業で使用する際の利便性や操作性が大きく向上した。 ・講師控室のソファersetを打合せテーブルセットに更新し、講師との打合せや資料確認を行いやすくした。 ・体育館の屋根・外壁の全面補修工事を行った。（県発注の長寿命化工事、工期約6か月） ・研修室、コモンスペース、図書室、食堂等を自習室として	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			開放することで自主的な学習の場が確保できている。その際、希望に応じエアコンを稼働させ、快適な学習環境を維持している。			
学校施設	8	図書室の整備や福利厚生施設の整備等、学生のための環境整備は行われているか。	学生のための環境整備として次のような取組みを行った。 ・教室棟1階のトイレ4基を温水洗浄便座に改修した。これにより令和4年度から行ってきた教室棟のトイレ改修がすべて終了した。 ・学生用ロッカーが老朽化していたため、1・2年生用を更新した。（3年生用はR5年度に更新済） 施錠はダイヤルロック式に変更し利便性を高めた。 ・自動販売機は年度当初に業者撤退していたが、学生の要望を受け、新たな業者を探してリース契約により再設置した。その際、飲料に加えパンや菓子も購入できるようにし、好評である。 ・学生寮の脱衣所の床が傷んでいたため、全面張替を行った。 ・学生寮各居室の学習用椅子は寮開設時から継続使用し老朽化していたため、新しいOA椅子に更新した。	○		
教育活動	9	卒業時において持つべき看護師・助産師の能力を、教育目標に明示しているとともに、卒業時の到達状況を分析しているか。	（助産学科） ・教育目標をシラバス、実習要綱、学生便覧に明示している。折に触れ周知している。 ・全国助産師教育協議会の「助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と達成度」を活用し卒業時に学生の自己評価、及び結果の分析を教員が行った。 ・科目ごとにシラバスに沿った客観式テスト及び分娩介助技術評価を行った。 ・形成的評価に加え、卒業時に分娩介助技術評価、総合評価、実習記録についての評価・分析を行った。指導者会議で分析結果を実習施設と共有した。 （看護学科） ・入学時及び各学年の初めにシラバスを用いて教育目標の説明を行い、浸透を図っている。その際、教育目標を基に学生自身がクラス目標を立て、共通認識する機会をつくっている。 ・3年次には知識・技術・態度を統合した臨床実践能力を客観的に測るためOCSEを行い、卒業時のレベルに到達していないと判断した場合は繰り返し指導を行った。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			また、3年間の実習を振り返り、その学びを主たる実習施設である好生館に伝え課題を話し合っている。			
教育活動	10	学習内容は、教育理念・教育目標と一貫性があり、時代の要請に応える内容になっているか。	教育理念・教育目標に沿い、講義・実習を行うとともに、時代の要請に応じ構成したカリキュラムに沿って実施した。（助産学科） - 正常な妊娠・分娩を学修の基本とするものの、臨床現場ではハイリスク妊娠・分娩が増加傾向にある。病院のみならず診療所でもハイリスク妊娠・分娩の観察・ケアを経験できる機会が増え、学生は実習施設の協力を得ながら学ぶことができた。 - 地域母子保健実習では、助産所、産前産後サポートステーションなどで助産師の役割について学び、将来のキャリアビジョンに繋げることができた。また、令和6年度は分娩の取り扱いがある新たな助産所を開拓し、助産所での分娩介助を学べる貴重な機会を得た。 - 事例検討や研究の基礎、学会への参加（オンライン）、ポートフォリオ作成などを通して、学問への探求心と助産師として生涯学び続ける態度を養っている。 （看護学科） - 医療の場が地域に移行している現状を鑑み、新カリキュラムで新設した「地域療養を支える看護Ⅰ」の一環として3年次に地域包括支援センター見学を実施した。13か所の地域包括支援センターの協力を得、地域住民の生活とその支援について学びを深めた。 - また、成人看護学実習に入退院支援センター、地域医療支援センター、がん化学療法室での実習を取り入れている。学生は、退院支援カンファレンスにも参加し、退院後の地域での生活を踏まえた上での看護により視点を向けるようになっている。 - 地域医療支援病院として高度な医療を行う母体病院で実習できるメリットを活かし、認定看護師の活動を見学する実習を取り入れた。学生は専門知識と実践力を持った認定看護師の看護を見学し、複雑な健康問題を抱える患者や家族への看護を深く考えるきっかけになった。 - 佐賀県医療センター好生館をはじめとした認定看護管理者2名、専門看護師2名、認定看護師26名を講師に迎え、専門性の高い講義を実施した。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	11	授業計画は、教育課程との整合性があり、授業内容や指導方法が学生レベルに合うよう工夫・改善されているか。	（助産学科） ・講義は正常から異常へ、妊娠期から分娩期、産褥・新生児期へと学生が理解しやすい順序となるよう時間割を調整している。 ・地域母子保健実習では、前期から後期にかけての講義内容、助産学実習での学びなどが重なることで、学生にとって学びがつながり深まった。 ・ハイリスク妊娠が増加している現状を踏まえ、実習前にOSCE や産科危機的出血等のシミュレーション学習を活用し、臨床判断能力の向上に努めた。 ・各分野で専門的な業務を実践されている講師に講義を依頼し、専門性の高い内容となった。 （看護学科） ・教育課程に沿った授業計画を作成している。 特に概論から各論、疾患から看護など、学生が理解しやすく、且つ学びの積み上げができるよう順序を考え時間割を組んだ。また、各実習に必要な講義は実習までに受講するよう進度を工夫し、実習で知識・技術が活用できるようにした。さらに各学年の進度に合わせ授業内容を構成し、学生の理解度を確認しながら授業を進めた。 ・実習で必要な知識を応用し、臨床判断能力を養うため、必要なシミュレーション教育を導入した。実習を経験していない学生であっても事前にロールプレイングを経験させることで、対象の心理状態にも理解を示すようになった。	○		
教育活動	12	単位認定の方法（評価基準や方法等）を、各科目担当者が理解しており、評価については妥当であるか。	（助産学科） ・外部講師にも講義初回に評価基準・方法を説明し理解を得ている。学院教員と共に評価計画・評価方法に沿って妥当な評価を実施している。 （看護学科） ・評価計画を基に外部講師・学院教員共に妥当な評価を実施している。	○		
教育活動	13	実習目標が達成できるよう実習施設との連携を行い、学生を支援する体制は整っているか。実習計画は施設に周知されて	（助産学科） ・実習開始前に各実習施設に出向き、個別に打合せを行っている。実習要綱及び実習指導要綱を配布し実習目標を共有している。 ・実習期間の節目に反省会、または必要時指導者との話し合いの場を設け、実習目標の達成に向けて早期に調整を行っ	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
		いるか。	たことで目標達成につながった。 - 令和6年度は延長実習などの相談・調整を図り、12名全員が10例の分娩介助を達成できた。 3月に実習関係機関と助産学実習評価会議を行い、実習全体の評価を指導者と共有し、次年度の実習指導に役立てている。 （看護学科） - 臨地実習指導者会議を年6回以上行い、学生が実習目標に到達できるように、学習内容や患者選定条件、指導方法の情報共有を行っている。会議は実習に於ける課題を明確にし、解決方法を考える機会となっている。決定した内容については、学生にオリエンテーションを通じて伝え、効果的な学習ができるようにしている。 また、実習中も施設の実習指導者とコミュニケーションをとり実習計画や指導方法の調整などを行った。 - 実習目標の達成や客観的な評価ができるように、ルーブリック評価を導入した。実習目標の到達度の明確化を行うことで、学生、教員、実習施設が共通の認識をもって実習ができるようにした。			
教育活動	14	学生の実習時のインシデント事例や感染リスク等について、教員は把握・分析を行い、学生指導に生かしているか。	過去のインシデントの集計結果から学生のインシデントの傾向を把握し各学科で共有した。実習ではインシデントを起こしやすい時期に学生に注意喚起を促す働きかけを行っている。 事前にこれらの取り組みを行った結果、各学科の発生状況は次のとおりとなった。ケースごとに要因分析し再発防止策を講じた。 （助産学科） - 令和6年度は8件のインシデントの報告が上がった。 うち1例はレベル3であり、フロー図に沿って早期対応を実施。病棟師長、実習指導者をはじめ関係者と調整・協議・対策決定を共有し、今後に活かすようにした。また、振り返りレポートなどの提出を受け、タイムリーに指導を行った。 （看護学科） - 令和6年度の学生からのインシデント報告件数は12件であり、昨年度より減少した。 学年別内訳は。1年生8件、2年生1件、3年生3件で合った。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			レベル別では、レベル2が9件、レベル1が3件であった。 内容別では、情報管理についてのインシデントが各学年で報告されている。 ・インシデント発生時は、学生と教員で原因分析を行った。背後要因を分析し学生の個人要因と環境要因のそれぞれに対策を講じる必要性があることが分かった。個人要因に関しては当事者個人だけの問題とせずグループ全体で振り返り、事案を学年全体で共有することで意識づけを図った。 ・情報管理については、実習オリエンテーションや実習中、繰り返し学生に啓蒙活動を行っている。			
教育活動	15	国試合格 100%を目指す、取り組んでいるか。	（助産学科） 次のような取組みを行い、8年連続で国家試験合格率100%となった。 ・入学前に国家試験の過去問題を提供し、解答の根拠を調べたノート作りの方法を提示し、学生の国家試験対策意識を高めた。 ・入学後は国試対策の時間を設けて毎月学生の学習状況を把握し、個々の学生に合わせたサポートを行った。また業者模擬試験及び国家試験過去問を解き、結果について教員と学生で分析し、不得意分野の攻略法を指導している。 ・取り組む姿勢・理解度等に個人差があり、機会を見て個人面接を行い個々の学生の状況に合わせサポートした。また、学生個々に合った学習環境を把握し、それを大事にしてサポートを行った。 ・令和6年度から全国助産師教育協議会が主催するCBT（コンピューターベースドテスト）に参加し、学生自身が現在の知識レベルを確認する機会となり国家試験対策につながった。今後も参加予定。 （看護学科） 下記の取組みを行った ・全学年の国家試験対策委員と教員で構成する国家試験委員会を定期的に開催した。各学年の国家試験委員がそれぞれ工夫しながらクラスの士気を高めるよう働きかけている。国家試験前には下級生から3年生への激励会、国家試験終了後には3年生から下級生に学習方法等を伝える機会をもち、学生のモチベーションの向上を図った	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			・国家試験までのカウントダウンを全学生が見える場所に掲示した。 ・夏季休暇中、各領域の担当教員による特別講義をクラス全体に行った。学生の反応は良く、参加者の動機づけに繋がった。成績が低迷していた学生に対しても教員の講義、グループ学習、個人学習への支援等、その学生の個別性に合わせ学習を支援した。 ・国家試験合格率は 97.4%であった。学生アンケートにおける学院の国家試験対策への満足度は 97.4%と昨年より向上した。			
教育活動	16	教員に各種研修会への参加、研究調査活動の機会を与えるとともに、教員自身も自己研鑽に努めているか。	（助産学科） ・令和6年度「アドバンス助産師」を1名取得した。また、全国助産師教育協議会「ファーストレベル研修」を受講し、助産師教育の知見を深めた。 ・そのほか、各教員が計画した研修に参加し自己研鑽に努めた。 （看護学科） ・教員9名全員が自分の専門領域のみならず、各分野の複数の研修に積極的に参加し研鑽を積んだ。 ・また、教員1名が日本看護学校協議会主催の令和6年度教務主任養成講習を受講中である。	○		
教育活動	17	授業評価を実施し、授業の改善に努めているか。	学生による授業評価または教員同士の他者評価を行っている。呼びかけを強化したことから実施率は令和5年度の41%から93%と大きく上昇した。 授業評価の結果を授業内容の精選、方法等の改善に活かしている。	○		
学生支援	18	進学、就職などの進路に関して学生の相談に十分応じているか。	（助産学科） ・入学早期から個別面談を実施し、学生全員に意向を確認し学生個々の就職活動を支援している。 ・就職支援としてジョブカフェやマイナビの研修を取り入れ現在の就職活動の実際に触れる機会を設けている。学生一人一人の要望に応じて、履歴書作成、論文や面接の指導を行うなど就職内定までサポートしている。 ・面接指導を行う時期は実習と重なるため回数多く実施できない。面接指導等の充実が今後の課題である。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			（看護学科） ・1年次より定期的に面接を行い、進路のアドバイスを行うとともにマイナビの研修等を取り入れ、自己分析や小論文対策を早期からできるよう計画的に進めている。 ・3年次は教員が履歴書作成指導、小論文指導、面接練習など学生一人一人に対し丁寧にサポートを行った。学生アンケートでは97.4%の学生が「十分サポートを受けた」と回答した。			
学生支援	19	学生の健康管理のための体制の充実が図られているか。	好生館に校医を依頼し、相談しやすい体制を整えており、校医にも親身になって対応してもらっている。 インフルエンザワクチン及びB型肝炎ワクチンについて、日程を調整し毎年好生館で接種させている。 定期健康診断で異常が見られた学生には受診勧奨や生活指導を行っている。また、感染予防の指導を行い、感染症が疑われる場合は受診を勧め拡大防止に努めている。	○		
学生支援	20	学生に対するメンタルケアの充実がなされているか。	（助産学科） ・実習や課題、テストなど多忙な学生生活であり、特に実習中のストレスは大きく、例年その時期にメンタルの不調をきたす学生もいる。スクールカウンセラーや学校医のメンタル相談などを複数回活用しメンタル面のサポートを行った。専門的立場からの助言をもらい指導の方向性を確認できたことで学生の対応に効果があった。 （看護学科） ・気になる学生については早めに声をかけ、教員が面談するとともに必要時はスクールカウンセリングを勧めた。また、教員間で情報共有を行い、統一したかかわりを持つようにした。 ・また、カウンセリングを気楽に利用してもらうため、1年生全員に対して初回面談を行う体制づくりを行った。	○		
学生支援	21	経済的に安心して学業に専念できるよう支援の充実がなされているか。	・給付型奨学金の対象機関の申請を行い、継続認定を受けた。 令和6年度は27人の看護学科学生が給付型奨学金を受給した。（助産学科は対象者無し） 給付型奨学金の受給者に対しては、併せて入学金・授業料の減免も行った。 ・さらに、好生館独自の奨学金制度（月額5万円、就職後返	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和6年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			還免除有)を設けており、令和6年度は8人が貸与を受けた。 ・好生館が募集する夕方勤務のナースエイドを学生に紹介した。 ・助産学科に進学する社会人経験者に対する専門実践教育訓練給付金制度の学校指定が3年ごとの更新期であったため、申請し再指定を受けた。令和6年度は5名が受給した。			
学生生活	22	交歓会や学院祭、クラブ活動などを通じて学生相互の交流が図られるよう、支援しているか。	(助産学科) ・助産学科学生によるピア講義を看護学科1年生に対し行った。 ・交歓会、学院祭を通じて交流できた。 (看護学科) ・各々の役割を認識し協働する力を養うために、学院行事のみならず、看護の探究、キャリア論等の講義、看護技術演習等で学年を超えたグループ活動を取り入れ、学年間で交流できる機会を設けた。上級生から下級生へ既習知識を教えることで相互に学習効果が見られた。	○		